日本人の言葉

―ナチスの蒙を啓く―

序

この一文は、私の親しい若い友人某君の質問に答へたものである。そういふ所から本文の序の代りに同君への手紙の一節を寫す事にし度い。

前　略

三國同盟に對して、私がどう考へてゐるか、といふ事に私は先づ答へよう。私がナチスをどう考へるか、といふ樣な事は二義的問題にしかすぎぬ。同盟は、陛下の御裁可を經て締結せられたものであり、その爲めに特に詔勅すらも賜つてゐる。詔書必謹、これ以外に我々の態度のあり得る道理は絶對にない筈である。

次に日本精神とナチス思想が、極めて近いものではないかとの君の言葉には、私は全く反對である。日本精神、日本思想といふものは、申すまでもなく、天皇の臣民たる日本民族のものである。獨逸には　天皇に擬し奉るべき何者も存在しない。皇統に比すべき何者も存在

しない。そこに日本精神に近いものが生れ得る道理は絶對にない。これ位明瞭至極な道理はない筈なのに、近ごろ君の様なことを云ひ出す人が少くないのを私は極めて遺憾に思つてゐる。

斷片的に、末梢的な點を摘出して類似點を求めるといふことになれば、人間には人間的な共通點があり、生物には生物的共通點がある。蘇聯にも獨逸にも英米にも、日本に類似した所もあらう。然し類似點があるといふ事は決して近いといふことにはならぬ。羅列的に類似點を擧げる事は、全く無意味である。眞に特色と稱すべき點に、果たして近い所があるか、否かが問題なのである。之は君に私が聞いて見度い所だ。

萬邦無比といふ事が如何なることか、之がただ無意味なる日本の枕言葉の様に解せられてはならぬ。

我が國は明治以後英米佛の自由主義思想や個人主義思想の放恣なる流入のために、一面に於て非常なる思想的危險に惱んだ。今やこの外來思想を克服するか否かの時に、更に獨伊的

全體主義の侵入を赦すといふ事は極めて危険である。

明治、大正時代の日本的思想家は、自由主義、民主々義の謬想を論破して、日本思想を闡明せねばならなかつた。今や昭和時代の我々には獨伊的強權主義、獨斷主義を論破しつゝ日本思想を闡明せねばならぬ時が來りつゝある樣に思はれる。

私は今後の大きな仕事として、ナチスの批判を自らの仕事として引き受けようと考へてゐる。こゝに私は、君の質問に答へてその一部分を提示する。私はヒトラアの主著（余の闘爭）に表れた彼の國家、國土、民族に就ての觀念が、日本民族の思想とは懸絶する者である事を指摘する。（余の闘爭）は、室伏高信氏譯と坂井隆治氏譯の二書から隨時引用した。

私は本文では、煩瑣な反對理論の構成といふ樣な事には意を用ひなかつた。私はただナチス精神が日本思想との間に明確に竣別さるべき事を指摘するにとゞめた。

三國同盟とナチス批判の關係に就て一言付加しておく。

嘗て明治大帝は、東洋平和のために日英同盟を締結し給ふた。今上陛下は、今や世界平和のために三國同盟を締結し給ふた。明治時代の日本的思想家は、日英同盟を締結して東洋平和の敵、露西亞と戰ふに努めた。然しそれは斷じて英國流の民主々義、自由主義のための戰ではなかつた筈である。三國同盟は決して日本がナチスのために戰ふ事を意味するのでない事は、今更論ずるまでもない事である。私は本文の末尾に、三國同盟に就て簡單に觸れる事にした。

英米的自由主義、民主々義を克服する方法は、あくまでも日本的方法によつて、日本流に之をなさねばならぬ。然らずして獨逸的精神によつて之をなすときには、前門の虎を追ふて後門の狼を迎ふる譏をまぬかれぬであらう。

ナチスの蒙を啓く

一、國家、國土

ナチスの思想は、民族主義である。ヒトラアに從へば、民族こそは主であり、國家とは民族の一機關にすぎぬ。

國家は文化を創造する事はできない――國家は單に文化を創造する民族に役立ち、それを保護し得るに過ぎない。（室伏譯二〇七）

從つて根本的認識は斯うだ、――國家は目的では斷じてない。反對に一つの手段であると。（坂井譯三二）

日本人の物の考へ方では、國家と民族とのかゝる分離は困難である。獨逸ではヒトラアの考

へ方も正當なものかも知れぬ。然し日本では、日本國家と日本民族といふものとは不可分のものである。日本國家を離れて日本民族といふ者は想像する事すら出來ぬのである。日本民族は、その發生と同時に國家的であつたのが事實である。だからして、日本民族の文化と云つても亦國家的文化なのである。國家的特色、國土的特色が著しい。國家、國土を離れて、日本民族の文化といふ者はあり得ないのである。

ナチスに從へば、國家は民族の機關であるが故に、國家の領土、國土といふ者も亦民族にとつて一の便宜的な功利的な手段機關にすぎぬものである事は、自明の理である。少しくヒトラアの語る所を聞かう。

紀元前のゲルマン民族を「未開の」野蠻人だと云ふが如きは不都合極ることである。——古代世界と云ふ樣なものがなく、ゲルマン民族が一氣に南方のもつと有利な平野に移住し、其處の劣等な諸民族の有する原料の中に、最初の技術的補助手段を獲てゐたならば、彼等の裡に假睡せる文化創造力は、彼のギリシヤ人に於けるが如く正に花々しく咲き誇つたことで

あらう。（坂井課三四）

ゲルマン民族と北歐の風土といふものゝ關係は、右の樣な單純な者にしか過ぎなかつた。ゲルマン民族が南進すれば、更に高い文化を早くから築いてゐたであらう、といふのである。この樣な考へ方は、日本人の考へ方とは隨分異つた考へ方である。日本の古典に從へば、日本民族は祖神の子であると共に、日本の國土も亦祖神の生み給ふ所である。日本に於ては、國土と民族とは共に神の生み給ふ所であり、共に神の子であり同胞である。日本民族は、大八洲（おほやしま）（この日本傳來の本土）に住みてこそ、眞の日本人なのであり、この嶋に住みてこそ、日本的文化が生れ得るといふ考へで發展して來たのである。日本民族は、日本の國土そのものを、產土の神と稱へ、國魂の神と稱へて、祭つて來たのである。

東洋史の學者に從へば、黃河の流域の豐沃な土地が高い文化を生んだといふ。然し日本人としての我々は、日本民族の祖先達が（一氣に黃河のもつと有利な平野に移住してゐたならば）

日本民族の文化が（正に花々しく咲き誇つたであらう）などとは想像し得ないのである。日本民族の祖先が、我々の鄕土にゐたればこそ、その土地の產土の神々と共に生きて來たればこそ、日本の文化が生れたのだと信じてゐる。

私はこゝで、產土の信仰に就て說明しようとは思はない。然しただ次の短い暗示を以て之に代へ度い。

日本人の文化の根本をなすものは、日本人の神に對する態度、惟神道である。黃河や楊子江のあの滔々たる濁流の畔からは、日本的神社の信仰が生れなかつたのは當然である。淸淨な瀧澄んだ海、靑々とした綠の山、神々の籠り給ふこの大八洲からこそ惟神道は生れなければならなかつたのである。國土と民族とを分離して思考することは、少く共日本民族の考へ方ではない。

この點で、全く異つた立場に立つヒトラアの國土觀念として、始めて次の如き言葉は理解される。

如何なる國といへども、他に優越せる權利をもつて、土地を保有してゐるのではない。國境は人間の作れるものである――したがつて人間によつて變更され得る。

我々の先祖は、天からドイツの土地を手渡されたのではない――今日の我々ドイツ人の住んでゐる土地とてもそのとほりである――將來我々に領土を齎すものがあるとすればそれは征服と劍のみである。（室伏譯三二〇）

私はかゝる言葉に對して、日本民族の思想を比較するの必要を認めない。ただ我々が祖先から繼承せる國土觀念が、如何に明るく、素直で、高尙平和的なものであるかを痛感する。

一、民　族

ヒトラアの國土、民族に就ての觀念は前述せるが如きものであり、それは民族と國土とを不可分の者と見ず、ただ民族の强弱盛衰に依りてのみ國土は變轉すべきものと考へるのである。

然してこの事は、外國の歴史的事實に基く考へ方でもあるからして、獨逸人たるヒトラアが、然う思ふ事は差支ない様なものでもあるが、日本人までもがかゝる殺伐な闘爭的思想に感染してはならぬ。（この點に於て、日本政府が東亞の新秩序建設の一條件として、領土的野心なき事を聲明したのは賢明であつた）

然らは、ヒトラアはこの民族闘爭の世界に如何に處して行かうと思つてゐるのであるか。民族闘爭の敵手たる異民族に對して、如何なる態度を以て臨まんとするのであるか。これは（余の闘爭）全文に渡つて、ヒトラアが詳述してゐる所であるが、要略すれば次の様な事になる。

卽ち

民族は、あくまでも純血を貴ばねばならぬ。ゲルマン民族は決して他民族と結合するが如き事があつてはならぬ。そして、この純粹なゲルマン民族は、實力を以て、武力を以て、他民族を征服し領土を擴張せねばならぬ。その闘爭の態度は、飽くまでも苛烈果敢無慈悲的でなければならぬ。敵を全滅せしむるの慨を以て進まねばならぬ。神は、かゝるゲルマン民族の態度を

以て良しとするであらう。何となれば、强者が弱者に打ち勝つて、支配者となる事こそは、神の意志であるからである。

これがヒトラアの民族思想の概略である。（余の闘爭）の中から二三の引用を試みる。

（一） 自然の法則は、劣位の者を優位に引上げんとする事にはなくて、優位なる者が絶對的勝利を占めることを求めてゐる。强者が支配しなければならぬ。これを以て殘酷と見るのは弱者のみである。種族の純潔を保持せんとする法則は、本能的なものである。狐はつねに狐、鵞鳥は鵞鳥、虎は虎であり、恰も猫が鼠と親しまないのと同様に、鵞鳥に對して愛情を示す狐は決してゐないであらう。

自然はかゝる狀態をよしとする。なんとなれば、弱き者は滅亡するが故である。

（室伏譯一六一）

（二） 民族國家は他國の利害に拘泥してはならない。國境は人間の作れるものである——し

たがつて人間によつて變更され得る。（室伏譯三二二）

（三）　我々の眼前に存在する證據によれば、今日の文化の殆んど大部分がアリアン民族の所產であることが明らかである。この明白な事實から見て、アリアン民族が全文明の創造者であり、從つてアリアン民族こそ我々が意味する「人間」の原型であると演繹することが出來る。アリアン民族こそは、人類のプロメテウスである。この神の光榮を擔つた大天才である。この民族が姿を消したならば、地上には再び暗黒の闇が訪れ、恐らくこゝ數千年間は文明も姿を消し、この世は沙漠と化するであらう。此の世に於ては、優秀なる民族に屬せざるものはすべて屑である。（室伏譯一六四）

アリアン民族（ゲルマン民族）こそは、人類最高の選ばれたる民族であり、ユダヤ人とか東洋人などといふ者は、輕蔑すべき弱者に過ぎぬのである。かくしてヒトラアの東洋被壓迫民族

やユダヤ人に對する態度は次の通りである。

至る所で獨逸國民の自由の爲めの闘爭を開始した時、各方面の人々が我黨に入り來つて、黨と、他國の自由のための闘爭とを結び付けやうと試みた。こゝに「被壓迫國民の同盟」が多くの人によつて宣傳された。其時は主としてバルカン諸國の代表者、更に又埃及、印度の代表者が集まつて來た。吹けば飛ぶ樣な近東人に煙にまかれたり、風來坊の樣な印度や埃及の學生達をその國の代表者だと信じた獨逸人がたくさん居た。彼等は、集まつて來た人々は權利のある代表者ではなく、契約を結んでも何等効果はないといふ事を全く考へてゐなかつた。勿論余はかゝる試みに反對した。たとへ集まつた人々が全權をおはされた代表者であつたとしても、かゝる試みは無用であり有害でさへあると思つた。

「被壓迫民族の同盟」によつて世界列强に對抗せんとするは笑ふべき事であるのみならず、有害でさへもある。蓋しそれによつて實際に出來る事まで不可能になるが故に有害なのである。實に現在の獨逸は溺れんとして藁をつかんでゐるのだ。

尙又一九二〇―二一年には獨逸國民の間に、英國は印度のために亡びつゝあるのだ、といふ子供らしい譯の解らない期待がもたれてゐた。これは歐羅巴を渡り歩く印度の志士の流言によるものであつた。勿論これは馬鹿々々しい考へである。彼等は、印度が英國の支配を脫すれば英國が、滅亡すると考へてゐるが、それは間違である。それに英國が印度を手ばなす等と考へるのは、世界大戰を知らぬものであり、アングロサクソン民族の果敢さを知らぬものである。印度の暴動が如何に猛烈であらうと、英國の支配から脫する事は出來ない。又埃及の叛亂から何物かを期待することも憐れといふも愚かな考へ方である。弱小國の同盟によつて大國をたほす事は不可能である。民族的な人間として余は、人種的に下等な所謂「被壓迫民族」と獨逸民族の運命を結び付ける事に反對した。（坂井譯二六〇―二六二）

ユダヤ人には無慈悲といふ手段以外で接近してはならない。でない限り、必らずその手を嚙られるだらう。（室伏譯一二八）

私は敢て、こゝてヒトラアの人種的偏見乃至は極端なる前世紀的な白人的獨斷主義に對して、理論的抗辯を試みる必要すらも認めない。私は明治維新の巨星、西郷南洲の遺訓を以て之に對照して見よう。私はこの二つの決定的な對照の中に、日本的維新とナチス革命との二つの精神の相違が、全般的に明示せられて居るのを感ずるのである。

西郷南洲先生の遺訓に曰く

「文明とは、道の普く行はるゝを言へるものにして、宮廷の莊嚴衣服の美麗、外觀の浮華を言ふに非ず。世人の西洋を評する所を聞くに、何をか文明と云ひ、何をか野蠻といふや、少しも了解するを得ず。眞に文明ならば、未開の國に對しては慈愛を本とし、懇々說諭して開明に導くべきに、然らずして殘忍酷薄を事とし、己を利するは野蠻なりと云ふ可し」

私は更に日本の古典を想起してもらひ度いと思ふ。記、紀に表現せられる天孫民族（日本民

族）の天孫降臨の際に示された直ほく、明るい態度の偉大さに今更の樣に感嘆させられる。對立する者を内包して、之を心服せしめて來た發展的包擁力を嘆稱してやまない。出雲大社や諏訪の大神は、我が日本國家の守護神として鎭座ましますのである。何故に、如何にして、この神々は我が日本國家の守護神たり給ふに至つたかを、私は改めて回想してもらひ度いと思ふのである。

私は更に、韓國から佛教や儒學が日本に流入して來た歴史や、韓國からの移民達が如何にこの國で懇切に待遇せられたか、そして之が如何に日本人の血液の中に融合して行つたかの歴史を回顧してもらひ度いのである。私は固より無秩序なる文化の流入、放恣なる異民族間の雜婚に同意するものではない。文化を移入すべきの道、異民族を融合すべきの道、その道は嚴として之を守らねばならぬ。然し日本民族の祖先が、この偉大なる事業を美事に成就した事實を忘れてはならぬ。佛教の流入も、儒學の流入も、固よりそれ相當の危險を感じさせはしたけれども、大局的に見て、この文化の流入が日本文化をして開花せしめ豐にし發展せしめたことは明

かなる事實である。韓の人々の子孫も何時しか（それも歷史の示す所に依れば、驚くべき短い年月の內に）純乎たる日本人と同化し切つて、大君のため御奉公の誠を盡し、日本文化の發展のために赫々たる功績を擧げてゐるのである。

私は考へる。この差はただに日本思想の聰明なる雄大さと、ナチス精神の狹量と頑愚の差の中にその原因があるのではない。それは民族そのもの丶本來的優劣の差である。日本民族の如き眞に優秀なる民族のみが、强食弱肉といふが如き修羅場を現出することなくして、世界平和、世界國家の建設（八紘一宇）を出現し得るのである。

* 世界國家の建設、八紘一宇の具體的姿は如何なるものか。そこに到達すべきの道如何といふ事は、最も重要なる所である。それを論ずる事は、今の私の任務ではない。この點に就ては古事記の中の天照大神と素戔嗚尊どの關係、及び前述の天孫降臨に示された神業の次第に於て示されてゐるといふ事をのみ指摘しておく。

(余の闘爭)は、ヒトラアの政權獲得前に書かれたものであり、當時ヒトラアは佛蘇を敵とし(就中フランスを永遠の敵なりとし)之に對し、英國及び伊太利(就中英國)と同盟して抗爭すべき事を主張してゐた。然し歴史の進行は、ヒトラアをして英國との同盟を斷念して、之と決戰するの餘儀なきに立ち至らしめた。然しこの事情の變化にも拘らず、同盟に關するナチス的精神は、當時のヒトラアの言論の中に躍如たるものがある。佛蘭西を敵とする理由に就てヒトラアは次の如く述べてゐる。

ドイツ國民の永遠の敵はフランスであり、いつまでもさうである。

フランスの支配者が、ブルボン家であらうと、ジャコバン黨であらうと、ボナパルト黨であらうと、ブルジョア民主主義者であらうと、僧侶的共和主義者であらうと、あるひはボルシエヴイキであらうと、フランス對外政策の最後的目標はつねにラインランドを保有すること、ドイツを無組織、分裂の狀態におくことによつて、この國境をフランスのために保證す

ることである。

イギリスはドイツが支配者となることを好まないが、一方フランスはドイツそのもの丶存在を喜んでゐない。これは根本的な相違である！（室伏譯三〇三）

フランスは、かくの如く支配者が何人であれ獨逸の敵なのであるから、盟邦を作つて之を討たねばならぬ。かくてヒトラアはその盟邦たる英國を如何に觀察したか。

（一）イギリス人ぐらい、經濟征服のために残忍に武力を用ひ、さらにその無慈悲な手段を使用してゐる國民はないだらう。

イギリス國民は、政治的勢力から經濟上の利益を得、またあらゆる經濟的な進出を政治的權力に變化させてゐる。イギリスは、その經濟政策の擁護のために血を流すことを喜ばないと考へたことは、何といふ大きな誤謬であつただらう。（室伏譯九二）

（二）　問題は、どうしたら武器をとるにふさはしい國民の精神を創造することが出來るかといふことである。

一度この精神が國民のうちに盛り上つたら、その精神はいづれの場合にも武器によつて解決しうる幾多の方法を見出してゆくであらう。

人間は人間と結びつくものであつて、武器と結びつくものではない。

それ故に、イギリスの指導者と大衆とが、勝利をもたらす野蠻性と忍耐力を有する限り、イギリス人は同盟を結ぶに最もふさはしい者と見做されるであらう。（同一七九―一八〇）

ヒトラアが盟邦に對して期待する所は、右の如きものである。然してヒトラアの同盟そのものに就ての觀念は、次の如きものである。

同盟は――たとへ同盟締結の當時に於て戰爭勃發が如何に遠い後のことに見えようとも――ただ軍事的闘爭を目標としてのみ締結される。

いかなる國といへども同盟をこれ以外のものとは見ないであらう。（室伏譯三二五）

そして同盟國相互間の關係に就て

同盟國もまた敵國となることがある。

イギリスの政治家がイギリスの利益にならない政策に從ふことは、到底あり得ないといふ事實にも拘はらず、しかも、ドイツの利益となる政策と一致し、協力し得る様なイギリスの利益になる政策を見出すことはあまり困難ではない。勿論、この情勢はただ或る限られた時間だけしか繼續しないかも知れないし、暫くの後には正反對の事情に變化することもあり得る。しかし熟練した外交家は、與へられた時期に於て、自らの利益のために、同じ道を進まざるを得ない外國の指導者を見出す方法を知つてゐる。（室伏譯三〇二）

この思想を根本とするナチスが、對英協調不可能と判斷するや、防共協定の存在にも拘はら

ず一轉して、獨蘇不可侵協定を締結するに至つたのは、不思議でもなければ、怪奇でもあり得ないのである。世上には獨逸が英國を征服した後に於て、蘇聯との間に、或は伊太利との間に再び爭覇戰を演ずるか否かを問題とする人々がある。之は問題とする程の事はない。ヒトラアは、あくまでも制覇を目指して進軍する事は疑の餘地なき所である。即ち曰く

ヨーロッパ大陸上に二大強國の出現を決して許すな。ドイツに國境を接して強國の創造さるゝ事を許さず、必要に應じては、それを阻止するために武力を用ひ、かゝる強國が實際に出現する場合は武力によつてそれを壞滅せしむることが、ドイツ國家の義務である。

（室伏譯三二八）

蘇聯は既にポーランド戰爭以來獨逸と國境を接するに至つた。伊太利とは墺國侵入以來國境を接するに至つた。ヒトラアに從へばドイツに國境を接するこの二大強國（蘇聯と伊太利）を武力によつて壞滅せしむる事は、ドイツ國家の義務である。

かくしてヒトラアは、永遠にゲルマン民族の純粋性を強調しつゝ世界の支配を目標に進まんとしてゐる。(余の闘争)の結語に於て、ヒトラアは斷言する。

國家も亦、民族が害毒に冒されてゐる時、優良なる人種の育成につとめたならば、いつかは世界の支配者となり得るであらう。(坂井譯二八四)

私は、こゝにナチス的世界支配と、日本人的八紘一宇の區別を論ずるの必要を認めぬ。ナチスの道は永遠の闘爭であり、それは決して實現し得べからざる覇者の空しき熱望にしかすぎぬ。それは**ジンギスカン**の道であり、**ナポレオン**の道である。

嘗て日本は、英國と同盟して東洋の平和のために圖つた。今や日本は、獨逸と結んで世界の平和のために圖つた。然し嘗ての英國は日本と結ぶに際して、東洋平和の日本的スローガンに唱和しつゝも、その侵略的自由主義的本質を聊かも改變させる事をなさず、遂に東洋平和の敵として終始せざるを得ざるに至つた。獨逸は今や世界平和の日本的理想に唱和しつゝ、猶その

ナチス精神を棄てず、日本的精神にまつろう（伏する）事を拒否するならば、遂に永遠の修羅場より脱するを得ないであらう。

日本的八紘一宇の精神は、劣等民族の滅亡を目的とせず、世界萬邦の救濟に存する。日本民族は、同盟を通じて獨逸民族の蒙を啓き、そのナチス精神を祓ひ、淨めて、日本的精神にまつろうはしめ（伏せしめ）ねばならぬ。

日本民族はヒトラアの如く（民族國家は他國の利害に拘泥してはならない）などとは考へない。日本國家は、天皇が世界人類を救濟し給ふための最高の機關であり、日本民族は國家と分離すべからざる永遠の機關員である。（冒頭のナチ的國家觀と對照）

跋文

本文に於て、私は日本精神とナチス精神との相違を國家、國土、民族、外交、同盟等の諸點に於て指摘した。これらのナチス的觀念は、ヒトラアの一貫せる世界觀に基礎を有するものである。從つてナチスの他の部面に於ける思想（國內政治、宣傳、教化、經濟、組織、其他の政

治戰術等）に於ても、同樣の著しき相違を生じて來る事は、必然の理である。この懸絶せる相違を無視してナチスを日本政治の參考にすることは斷じて赦すべからざる所である。

世上、ヒトラアユーゲントの農耕教育等の思想を以て、日本的國土觀念に比する者があるが、之は恐るべき日本思想の缺乏を意味してゐる。日本の產土神に對する信仰がないから、斯樣な混同を生ずるのである。

固より部分的斷片的技術的問題には、參考となる點もあり得るであらう。然し乍らそれは蘇聯赤軍の戰術を研究する事も亦、皇軍の參考となり得る場合もあるだらう如き意味に於てのみ參考となり得るにすぎぬだらう。

（余の鬪爭）の中に於て、ヒトラアは日本民族の文化と歷史に對して、甚しい侮辱的見解を展開してゐるけれども、之はむしろ白人通有の東洋に對する無智無學の然らしむる所であるとして、本文に於ては敢て問題としなかつた事を附言しておく。

【非賣品】

昭和十五年十一月　八日 印刷
昭和十五年十一月十一日 發行

著者印

著者　鎌倉市長谷原ノ台一四一八
葦津珍彦

發行者　横濱市鶴見區鶴見町一〇八二
吉川永三郎

印刷所　東京市京橋區越前堀一ノ一〇
金泉社印刷所

印刷人　東京市京橋區越前堀二ノ二三
遠藤文藏

發行所　横濱市鶴見區鶴見町一〇八二
兄弟會